九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ものゝあはれと出家 : 源氏物語の一考察

竹岡, 勝也

https://doi.org/10.15017/2344461

出版情報：史淵. 2, pp.56-76, 1930-12-28. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

ものゝあはれと出家

―源氏物語の一考察―

竹岡勝也

源氏物語の文化史的な意義を決定する爲めに、先づ第一に顧られなければならないものにものゝあはれと云ふ言葉がある。此のあはれと云ふ言葉は此の時代の和歌物語、その他日記隨筆等の類を通じ、屢々求める事の出來る言葉であつて、殊に源氏は至る處に於いて此の言葉を使用して居る事が見られるのであつた。そして此のものゝあはれを和歌物語の本質としてその性質を明瞭にするに至つた事は主として近世國學者、就中本居宣長の著しい一つの功績であつたと云はれなければならない。此の問題に就いては嘗つて「國學者の運動」に於いて觸れる處あつた。併しながら源氏に對する宣長の解釋は此の問題の發展と深き關係を持つが故に、茲に改めて彼の源氏研究である紫文要領及び玉の小櫛の一斑を顧て置きたいと思ふ。

先づあはれと云ふ言葉の意義であるが、彼に從へばあはれとは要するに心の感動であつて、必ずしも悲哀に限る事なく、嬉しき事、面白き事　おかしき事、凡て心の感じ動く事は皆悉くあはれである。固より此のあはれが發動する爲めにはあはれの對象がなければならなかつた。例へば花があはれの對象である場合には花を詠嘆する形に於いてあはれは發動する。即ち花を詠嘆する事は花のあはれを知る事であつて、かくして常に對象を豫想し

て、而かもその對象を限定する事なき場合に、初めてものゝあはれを知るなる言葉は適用されるのであつた。更に宣長はものゝあはれを知る事の前提として、ものゝ心を知ると云ふ事を擧げて居る。「よろづの事を心にあぢはへて、そのよろづの事の心をわが心にわきまへしる、是事の心を知るなり、物の心をしるなり、物の哀をしるなり」と云つて居るが、之を區別して見れば、わきまへしる所は物の心、事の心を知る事であつて、そのわきまへしる所に從つて感ずる所がものゝあはれを知る事である。例へば櫻の盛に咲きたるを見て、之をめでたき花と見るは物の心を知る事であり、めでたき花とわきまへしりて、さて〳〵めでたき花かなと感ずる所が即ちものゝあはれを知る事である。此の意味に於いて物の心を知る事はあはれの發動に對し、そのあはれの發動を誘致する客觀的根據の認識を意味するとも云はれるであらう。かくの如き區別はあるのであるが、物の心を知るものが物の哀を知る事は自然の人情であつて、此の間には已むに已まれぬ力が作用して居る。即ち物の心を知る事は物の哀を知る事を豫想せしめるものであり、物の哀を知る事は物の心を知る事を前提とする。此の二つは常に相伴ふべきものであつて、從つて之を一體として見る事も出來るのであつた。かくして物の心を知る事は物の哀を知る事の中に包括せられ、又物の哀を知る事の一つの性質を限定する。即ち物の哀を知る事は要するに心の感動ではあるが、それはしみ〴〵と物に感ずる事、物の心を知る事に伴ふ心の感動である。瞬間の感激と云ふよりは寧しろしみ〴〵と心に湛へる感動である。茲には一つの情調がなければならなかつた。

以上はものゝあはれに對する宣長の解釋であるが、更に宣長に從へば物の哀を知る事も、物の心を知る事も、共に心の本然に基くものであつた。そして此の心の本然に基く物の哀を宗として記されたものが即ち物語である。物語とは中世を通じ誤解されて來たが如く、勸善懲惡、或は人生の無常を知らしむる事を以てその目的とす

るものではない。從つて是等の見地から物語の價値を論ずる事も亦出來ない。物語の本質はものゝあはれを知る心に求められ、從つて物語の價値は又此の心に依つて決定されなければならなかつた。此の意味に於いて源氏は殆んど類例を見ない勝れた物語である事が論じられて居る。

兎に角物語の本質は物の哀を知る心に求められる。而かも此の物語の世界に於いては「物のあはれを知れるかたをむねと取りてよき事とする」が故に、人間の評價に於いて、往々にして世の常の道理と矛盾する場合がなければならなかつた。例へば源氏の君は大不義あつて好色のみだれ甚だ多かつたのであるが、物の哀を知る故を以てよき人の典型とされ、佛神も之を捨てる事がなかつたのである。その他矢張り源氏に於ける藤壺の中宮と弘徽殿の大后との對稱の如き、最も明瞭に此の關係を示すものであつた。即ち彼は「儒の道などの心ばへをもていはむには、藤つぼの中宮などこそは弘徽殿の大后よりもあしき人に云ふべきを、それをば世に勝れてよき人のもとに云ひて、不義などはおはしまさぬ弘徽殿などをしもかくいみじくあしき人にいへるは、物語はものゝあはれを知れるかたをむねと取りてよき事とすればぞかし云々」と云つて居る。そして物語が好色の題材を多く取扱つて居る事に就いては、戀は人情の自然に基くものであつて、何人も忍び難きは此の戀であり、最も深くあはれを感ずるものも亦戀である事が語られて居るのであつた。殊によろづ世に勝れたる源氏の君と薄雲の女院との密通は「よろづすぐれて心にかなふ人にはことに思ひの深くかゝる物」なるが故に、又「あひがたく人のゆるさぬ事のわりなき中はことに深く思ひ入りて哀の深き物」なが故に、「ものゝあはれの深かるべき限りを取あつめて」書けるものだと云つて居る。そして物語に於いてはかくの如き不義密通を犯した源氏の君と薄雲の女院とが最も勝れた人間として評價される事が出來たのであつた。物の哀の心の趣く處、時に不倫の戀と雖忍び難き場合がある

事を豫想しなければならなかつた。併しながら之は固より不倫の戀そのものを德とする事ではなくして、「あはれをしりたるしわざをよしとする」事を意味して居る。例へば泥水より生ひ出でたる蓮の花の世にめでたく咲き香へるが如き類であつて、不倫の戀は矢張り泥水である事を免れなかつたのである。然らば何故に不倫の戀は泥水でなければならないか。又物語の世界と矛盾する世の常の道理とは何を意味するものであるか。宣長の思想に就いて見るならば茲には確かに一つの問題がある。併しながら茲には兎に角宣長が和歌物語の本質としてものゝあはれの心を見出した事、及び物語の世界に於いては「あはれをしりたる仕業をよしとする」事、換言すれば人格評價の根底がものゝあはれを知る心に置かれて居た事が矢張り宣長に依つて指摘されて居る事を見れば足りるのである。

以上宣長の解釋は歴史的に云ふならば源氏研究の態度に一つの革命を齎らしたものであつた。佛教との關係に依つて源氏の價値を決定せんとする中世的な研究の態度、その他所謂世の常の道理を之に求めんとする勸善懲惡的な研究の態度は之に依つて根底から覆されたと云はれなければならない。併しながら茲には尙多くの問題が殘されて居る事も見逃がす事は出來ない。殊にものゝあはれの心と物語との關係に就いて、例へば源氏は果して物のあはれの限りを取り集めて、此の物のあはれを人に知らしめる事を目的として、制作されたと見らるべきものであるか。ものゝあはれの深かるべき限りを描寫する爲めに、特に源氏と薄雲の女院との密通が取扱はれて居るものであるか。此の問題に對する宣長の態度は明瞭を缺くものがあるが、少く共物語を或る他の目的の爲めに奉仕せしめんとする中世的な研究の態度から充分脫却し切る事が出來ないで居ると云ふ事丈は認められなければならないであらう。從つて物語の世界と云ふ特殊の世界も問題とされなければならなかつた。宣長の態度の動搖は

茲に於いても見られるが、兎に角嚴密に云ふならば物語の世界とはものゝあはれを知らしめる目的を以て構成された物語の世界の意味であつて、世の常の道理に支配されない一つの根據は、此の特殊の目的を以て構成された物語の世界であると云ふ處に置かれて居る事が見られる。物語の世界は要するに方便の世界であつて、直ちに之を以て現實の世界に即せしめる事は出來ない。併しながら物語の世界に對する此の宣長の解釋は、少く共源氏の如き物語の場合に於いて、果して妥當であるか。制作としての物語と、作者の人格との間には更に密接な關係がなければならないであらう。「あはれをしりたる仕業をよしとする」事は、それは特殊の使命を持つ處の物語の世界であるが故にではなくして、その物語の世界を創造する事の出來た作者の態度の問題となつて來る。物語制作の目的は作者の理念に表現を與へる事それ自らの中に求められなければならない。其處にこそ獨立した純粹な藝術としての物語の立場が置かれて居るのであつて、一面に於いて宣長も全然此の立場を物語から見逃がして居るとは云はれないものがあつた。矢張り玉の小櫛の中に、女は殊に心の結ぼほれるものである事に就いて源氏の中から色々の言葉を引用して居る次に、表現を求めて而かも表現が與へられないで居る此の結ぼほれた心、茲に物語制作の衝動が求められる事を語つて居る。即ち勝れて深く物のあはれを知れる作者が、「心のうちに結ぼほれて忍び込めてはやみがたきふしぐを、その作りたる人の上に寄せて、詳はしく細かに書き顯はして、おのが良しとも惡しとも思ふ筋、云はまほしき事どもをも其人に思はせ言はせて、いぶせき心を洩らしたるもの」こそは物語である。そしてそのあはれに就いては「あはれてふ言にしるしはなけれども、云はでは得こそあらぬものなれ」と云ふ貫之の歌を擧げて、表現を求める已むべからざる衝動を之に認めて居るのであつた。又宣長は源氏の制作に關する作者の言葉を、螢の卷に於ける源氏と玉鬘の君との物語に關する問答の中に求めて居る。そして此

の問答に依つて見れば物語は必ずしも空言として一概に排斥せらるべきものではなく、「その人の上としてありの儘に云ひ出づる事こそなけれ」、良きに付け悪しきに付け、心に籠め難き世の様人の有様を、換言すればその時代に生存して居る作者自らの體驗を、或る構想の下に表現したものに外ならない。從つてその構想はありの儘に經驗された出來事を移したものではないにしても、要するにそれは「此の世の外の事ならずかし」と云はれるのであつた。少く共あり得べき事である意味に於いて、物語には一種の誠がある。此の物語の誠こそは源氏をして源氏たらしめた所以であつて、同時に此の言葉に依つて源氏一篇の大意を求めんとして居る宣長の見識も、歴史的に見るならば確かに驚嘆に價すると云はれなければならない。併しながら宣長は一方に於いて又世の常の道理と、嘗つて行はれた佛教的或は儒教的文學論の傳統的な形式とに支配されなければならなかつた。即ち彼には一面に於いてその儘中世的とも云はるべき文學論の形式を踏襲して、唯纔かにその内容に於いて儒佛の道を排斥し、もの〻あはれの心を以て之に代らしめて居ると云ふ態度が殘されて來て居る事が見られるのである。そして彼が此の傳統的な形式を脱却し切る事が出來ないで居る一つの原因は、確かにもの〻あはれの心に人格評價の根底を求めんとする物語の世界に於ける道德と、世の常の道理との矛盾に置かれて居るのであつた。物語の世界に於いてはさうであつた。それを彼は認めて居る。併しながら其處には屢々世の常の道理と矛盾しなければならない現象が起つて來て居る。物語を物の哀を知らしめる目的を以て構成された特殊の世界であるとする事に依つて、此の矛盾を回避する事は出來るであらう。併しながら茲には新に物語の世界そのものに對する矛盾が現れて來なければならない。即ちそれは嘗つて作者が自ら思ふ事云はまほしき事を、作中の人物に思はしめ言はしめて居る物語であつたからである。茲に物語の世界に對する宣長の態度の動搖が見られなければならなかつた。要するにもの

ゝあはれの道德と、世の常の道理との矛盾に對して、宣長はあまりに回避的な態度を取つて居る。此の矛盾は作者自ら惱まされつゝある矛盾であつて、物語の中にも屢々現れて來る處の矛盾であつた。平安朝の貴族の生活を破綻に導く重大な矛盾であつて、到底宣長の如く簡單に之を回避する事は出來ないのである。

次にものゝあはれそのものに對する宣長の解釋は妥當な言葉であると言はれるであらう。あはれなる言葉の用語例は多種多樣を極めて居るには相違ないが、要するにそれは心の感動の範圍を出でる事は出來ない。唯それは平安朝貴族に依つて特色付けられた心の感動であつて、その特色に對して宣長は物の心を知ると云ふ言葉を適用して居るのであつた。例へば夕霧の卷に女の身の上に就いて「大方物の心をしらず云ふかひもなき云々」と云はれて居る物の心であつて、此の心はあはれの發動を誘致する對象の情趣、更に常にかくの如き心に於いて對象を眺める事に馴らされて來て居る彼等に取つては、それは又對象の本質としても考へられたであらう。兎に角その物の心に觸れる事に依つてあはれは自ら發動して來る。花には花の心があり、秋には秋の心がある。その心と感動に依つて結合する事が即ちものゝあはれを知る事であつた。そして彼等は此のものゝ心、或はものゝあはれなるものに對して、又形而上學的な一つの根據を與へようとして來て居る事が見られる。「やまと歌はひとの心を種として萬の言の葉とぞなれりける」と云ふ古今集の序文が即ちこれであつて、之に依れば獨り人間に限らず花に鳴く鶯、水に住む蛙、その他生きとし生けるものは一として歌を詠まないものはないのである。歌の心は一切の有情に通ずる心であり、而かも天地は又此の心に依つて感動する。換言すれば一切の有情と共に天地は又あはれを以てその心とする。人間が自らの內に感ずるあはれの衝動は、實に此の天地の心に根源を發するものであるとも云はれるであらう。此の意味に於いてあはれの發動は人間の意志を超越した問題となつて來る。物の心に觸れ

る事に依つてあはれは自ら發動して來なければならなかつた。そして此の物の心の解釋に天地の心を適用する事が許されるならば、此處に又一つの思想が發展して來る。即ち一切の有情非情は天地の心を心として存在する。あはれの對象である物の心は、あはれの發動を誘致する意味に於いて物の情趣ではあるが、それが物の情越である事の出來る一つの根據は矢張り此の天地の心との關係に求められる事も出來るであらう。少く共天地の心の象徴としての物の情趣なるものが此處に考へられて來る。之を自然に就いて云ふならば即ち風情であつて、此の風情をあはれの對象とする事は、此の風情に依つて象徴された天地の心に感動する事を意味して來る。之は人間に就いても同樣であつて、茲に至ればものゝあはれは主觀と客觀とがあはれに於いて共に鳴り響く事、或は人情の幽玄に觸れ、天地の心に觸れて、共に咽び泣く心の感動であると云はれる事も出來るのであつた。固より古今の序文は此の解釋に迄發展して來ては居ない。併しながら已に彼等は、あはれを以て天地の心とする思想に迄到達して居る。そして常に情趣に於いてのみ物を眺め、又之を考へて居た彼等に取つて、その情趣からものゝ本質としての心が發展し、一方此の天地の間に存在する神々の一つの屬性——例へば當時の華麗な祭に依つて示されるが如き——が抽象せられ、茲にあはれの根源としての天地の心なる思想が發展し、此の天地の心と物の心とが彼等の觀念に於いて結合される時に、自ら以上見る事の出來たものゝあはれの世界觀が豫想されて來るとも云はれるであらう。兎に角彼等は此のものゝあはれの心に對する哲學的な反省に迄到達して居た。そして此の思想の根源をなす處の天地の心、即ち天地があはれに依つて感動すると云ふ事は、必ずしも歌に就いてのみ考へられて居た事ではなかつた。宇津保は之と同樣の關係を屢々音樂に就いて語つて呉れる。天地が音樂の力に感動して色々の奇瑞を示すと云ふ話、已に俊蔭の卷に發端して居る此の話は、宇津保を一貫して此の物語の展開と密接な關連

を持つて來る。又後白河法皇は神佛が今樣に感動する事に就いて、「心をいたして、神社佛寺に參て、歌ふに、示現を蒙り望む事かなはずと云ふ事なし」と語られて居り、龍鳴抄の作者は又管絃に地獄なしと稱して、之が往生極樂の業ともなり得る事を語つて居る。「極樂淨土の鳥の聲も、風の音も、池の浪も、鳥の囀りも、これかやうにこそはめでたからめ。」月のあかゝらん夜、よもすがら遊びては、そのあはれはかくの如き淨土の夢想に迄導かれて行くのであつた。此の意味に於いて管絃は矢張り往生極樂の業となる事が出來ると云ふのである。

かくの如く天地も、佛神も、又淨土も、悉く此のあはれの一色に染めなして、その世界の中に於いて彼等は色々の遊びに沒頭し、あはれの限りを享樂する事を求めて居たのであつた。源氏は必ずしも物の　を人に知らしめる目的を以て制作されたものではないにしても、作者はかくの如き社會に一女性として生存して居る。かくして自ら體驗する事の出來たあはれは、色々の形に於いて此處に表現せられ、又之に表現を與へる事が源氏制作の一つの動機として、之に作用して來て居る事は爭はれないであらう。併しながら茲に於いても我々は源氏の作者は女性であつたと云ふ關係を見逃がしてはならない。此の時代の社會に於ける女性の地位、或は女性の運命なるものが、屢々作者の生活に於いて問題とされなければならなかつたであらう。一面から見るならば、此の時代は女性に取つて必ずしも呪はるべき時代ではなかつた。女性的なものが尊重せられ、從つて女性は色々の意味に於いて此の時代の文化に參與する事が要求されて居る。その爲めに女性は極めて自由に自らの心と自らの才能とを發展せしめる事が出來、その結果多くの才媛が彼等の間から輩出して來て居る。併しながら一方戀愛或は結婚の關係に於いては何うであつたか。蜻蛉日記の作者は茲に女性に就いての一つの運命を語つて呉れる。之を以て一切の女性を代表せしめる事は出來ないにしても、一般に一夫多妻の生活が認められて居る當時の貴族社會に於て

此の作者とその運命を同じくする女性の多かつた事は云ふ迄もなく、尙色々の形に於いて女性の心は此の一夫多妻の生活に虐げられなければならなかつたであらう。作者はかくの如き社會に一女性として生存して居た。そして中宮の女房として宮仕へするに及んでは、宮廷を中心として展開されて居る處の貴族の社會が、直接自らの體驗の中に取り入れられて來て居る。自らの思ふ事云はまはしき事に一つの表現を與へる事に依つていぶせき心を洩らさんとする物語制作の衝動が、先づ第一に自らの體驗の中に取り入れられた女性そのものゝ運命に就いて感じられたと云ふ事は寧しろ當然であつて、此の意味に於いて、此處に一つの中心を求めて源氏を取扱ふと云ふ態度も亦許されなければならないであらう。併しながら此の場合に於いても、「ものゝあはれをしりたる仕業をよしとする」此の作者の態度は問題となつて來る。宣長が物語の世界に指摘したものゝあはれの道德は、その儘此の作者の態度に移さるべきものであつて、その結果に於いて所謂世の常の道理と矛盾する場合があるにしても、尙「ものゝあはれをしりたる仕業をよしとする」此の作者の態度は、一貫して此の物語を支配して居る事が見られるのである。此の作者は一面、殊に女性に就いては「物の程」を知る事、即ち調和を失はない事を要求して居る。女性は色々の才藝を身に嗜なまなければならないが、その才藝に驕る事は又慎しまれなければならない。物の哀に就いても同樣であつて、女性の振舞ひは常に物の程を知る事に依つて制約せられ、從つて女の心はいぶせきものとして語られて居るのであるが、此の場合に於いても、尙「ものゝあはれをしりたる仕業をよしとする」作者の態度が失はれては居なかつた。然るに此の作者の態度が、或は自然の情景に、或は音樂の遊び等に適用される場合には、未だ問題を惹き起こすには至らないが、一度之が男女の關係に適用される時、茲には當然一つの問題を豫想しなければならなかつた。即ち戀はそれ自體として見るならば、宣長も云つて居るが如く、最も物のあは

れの深かるべきものであつて、「ものゝあはれはこれよりぞ知る」とさへも云はれて居るものであつた。「ものゝあはれを知りたる仕業もよしとする」作者の立場から見るならば、極めて重大な意義を持つものであつて、到底その本質に於いて戀を否定すると云ふが如き態度を、此の作者に求める事は出來ない。薄雲の女院と源氏との關係、その他屢々現れて來る處の不倫の戀に於いてさへも、矢張り「ものゝあはれをしりたる仕業をよしとする」作者の態度は之に作用して來て居る事が見られるのであつた。大不義を犯した源氏に對し、佛神も護りを捨てなかつた理由は、確かに玆に一つの根據が求められる。殊に兵部卿宮と浮舟との關係は何うであるか。兵部卿宮は親友の妻を盜む事に依つて親友の心を傷付け、而かもその妻である浮舟をして投身するの已むなきに至らしめて居る。而かも尙此の兵部卿宮に對して、薫大將も又浮舟も、その行動を肯定する一面を失はないで居る事が見られる。その理由は兵部卿宮の高貴な地位と、匂ふが如きその性格と、又浮舟に對する戀の誠とにあつた。ものゝあはれを知る高貴な宮の戀の誠の故に、かくの如き宮の行動も尙許さるべきものである事が出來たのである。從つて貴族社會に見る一夫多妻の生活も、必ずしも男の暴力としてのみ女に作用しては居ない。女自ら一夫多妻の生活を肯定しなければならない思想上の根據が玆に與へられて居ると見る事も出來る。男の戀は必ずしも一人の女を對象としてのみ働くものとは限らないからである。寧しろあはれであるべき女に對してあはれを感じない事は、ものゝあはれを知らない意味に於いて高き評價に價ひしないものであつた。此の意味に於いても源氏は矢張り理想的な一つの性格を示して居る。然るに女は多少之とはその性質を異にするものがあつた。例へば兵部卿宮と浮舟との關係に見るも、兵部卿宮に對してはかくの如き許るしが與へられて居るにも不拘、浮舟は自ら投身しなければならない心の苛責を感じて居る。兵部卿宮の妻である宇治の中君は、又飽く迄薫大將の戀に對して自らの心を

護らなければならなかつた。源氏の戀に身を委せて居る朧月夜の內侍は、必ずしもものゝあはれを知れる女として高く評價されては居ない。擅にあはれを表現する事は女の行動に於いては許されて居なかつた。從つて夕霧の卷に於ける紫の上の言葉、即ち女は物の心も知らず云ふかひなきものと思はれ勝ちである。又女の心は常に結ばほれていぶせきものであると云ふ言葉も聞かなければならなかつたのである。併しながら此の事は、必ずしも「ものゝあはれを知りたる仕業をよしとする」態度が女には適用されなかつた事を意味するものではなかつた。女と雖、寧しろ女なるが故に、特に物のあはれを知らなければならない。男の戀に對して無關心である女は心こわき女として擯斥される。源氏の戀を受け入れなかつた槿の齋院は、又「げに人の程のおかしきにもあはれにおぼししらぬにはあらねど、物思ひしるさまに見え奉るとて、おしなべての世の人のめで聞ゆらむつらにや思ひなされむ、かつはかるゞしき心のほどをも見しり給ひぬべく、はづかしげなむめる御有樣をとおぼせば、なつかしからむなさけもいとゞあいなし」と云つて、矢張り源氏に對する戀の心を語つて居り、飽く迄薫大將の戀を逃れやうとして居る宇治の大君は、多少之とはその性質を異にする處あるが、而かも尙その結婚を望んで居る女達に對して、「あやしう心こはきものににくむめるこそいとわりなけれ」と語つて、そして中君の艶に美しき姿を眺めては、その薫大將との結婚を夢想して居る。玆に於いても戀そのものゝ否定を求める事は出來ないであらう。矢張りあやしう心こわきもの、即ち戀のあはれを知らない女として擯斥される事を本意なく思つて居るのであつた。かくの如く形の上から見るならば明かに男の戀を逃れて居る槿の齋院や宇治の大君と雖、心には矢張り戀のあはれを抱くものであつたと云ふ事が出來る。唯その行動が色々の關係に依つて制約されて居たに過ぎない。あはれを知らないで高く評價されて居る女、あはれに代るべき價値に依つて評價されて居る女は一人として此の源氏の中に求

める事は出來なかつた。換言すればもの〻あはれを深く心に湛へて、而かも愼しみ深く性格の調和を失はない處に女性の理想が求められて居る。薄雲の女院、紫の上、槿の齋院等はかくの如き女性の典型として示されて居るとも見る事が出來る。

兎に角作者は矢張りもの〻あはれを深く知る事を女性に要求して居るのであつた。戀のあはれを知らない心こわき女は此の意味に於いて決して勝れた女性である事は出來ない。然るに此の戀のあはれに導かれる女性の結婚生活は何うであるか。玆に與へられるものが蜻蛉日記の作者に於けるが如き結婚生活であるならば、それはあまりにはかないものではなかつたか。獨り蜻蛉日記の作者丈には限つて居ない。源氏の中にも屢々その例を求める事が出來る。六條の御息所をして生靈死靈たらしめて居る原因も同樣であり、宇治の中君は早くも捨てられる女の悔恨を經驗して居り、それが一つの原因をなして姉の大君は病死しなければならなかつた。最も幸福な地位に置かれる紫の上さへも、或は明石の上に對し、槿の齋院に對し、女三の宮に對して、屢々嫉妬と戀のはかなさとを經驗しなければならなかつたではないか。殊にあはれは心の本然に基くものであつて、止めんとするも止め難きものはあはれである。その結果時には薄雲の女院と源氏、女三の宮と柏木の君、浮舟と兵部卿宮との場合に見るが如き不倫の關係も現れて來る。而かもその結果は、薄雲の女院と女三の宮とは共に出家して居り、浮舟は投身して後又出家の生活を送つて居る。かくの如き結果を導いたものは矢張り戀のあはれではなかつたか。もし此の場合に、その本質に於いて戀のあはれを否定する事が出來るならば、或は又あはれに代るべき新なる價値に依つてその生活が支配され得るとするならば、彼等には未だ救ひの道があるであらう。例へば兵部卿宮の行動を惡と斷定して、惡人として之を擯斥する事が出來るならば、惡ならざる生活を求める事に依つて、彼等を浮舟の

運命から救ひ出す事も出來る。然るに彼等は一方に於いて惡と之を斷定する事の出來ないものゝあはれの道德に支配されて居る。その結果として陷る女性の運命は儚き限りではあるが、その原因をなす處の戀のあはれは寧しろ高き評價にさへも價ひするものでなければならない。而かもそのあはれには止めんとするも之を止める事の出來ない性質が認められて居る。玆に此の作者は永遠に解決する事の出來ない矛盾を眺めなければならなかつた。それは正に運命と云ふ言葉に價ひするものでなければならなかつたであらう。源氏は一面、かくの如き運命を脫する事の出來ない女性の悲しき物語である。光源氏の性格に淺はかならぬ戀の誡を與へる事に依つても、又紫の上の心に、嫉妬と不安とから救はるべき戀の訓練を與へる事に依つても、到底此の運命を切り開く事は出來なかつた。玆に飽く迄華やかであつて而かも悲哀がその中に漂つて居る薄明の如き源氏の世界が展開される。其處には到底歡樂極まる處悲哀が伴ふと云ふ言葉では盡されない、寧しろ歡樂そのものゝ中に悲哀が漂つて、而かもその爲めに一層華がに匂ひ出て居るとも云はるべき不可思議な現象を見る事が出來るのであつた。そしてかくの如き源氏の世界は一面に於いて出家の世界と連續して來る。

出家は必ずしも此の物語を構成する重要な要素をなすものではなかつた。其處には如何なる生活があつて、如何なる價値がその生活を支配して居るかと云ふが如き問題は、此の作者に取つて重大な問題にはなつて來ない。少く共作者の興味の中心を玆に求める事は出來なかつたのであるが、物語の外に置かれる此の出家の世界なるものが、又屢々物語の世界と交渉して來なければならなかつた。單に源氏の中には多くの僧尼が現れて來ると云ふ丈の意味ではない。玆には又物語の世界から出家の世界に誘はれて行く多くの人々がある。換言すれば出家の世界は多くの人々を誘ひ出す力として物語の世界に作用して來て居る事が見られるのである。源氏に於いて問題と

せらるべきものは出家の世界そのものではなくして、寧しろ此の二つの世界の交渉と、その內面的な連絡とであつた。殊に此の問題は、以上見る事の出來たもの〻あはれの生活の破綻とも云はるべき女性の運命と關連して來る。固より此の時代の出家は女性に限つた事ではなかつた。又必ずしも戀愛丈が出家の動機をなして居るものでもなかつた。併しながら茲に直接問題として取扱はるべきものは戀愛に動機を發する女性の出家であつて、例へば薄雲の女院、女三の宮、浮舟、朧月夜の內侍の出家等が之であつた。彼等は何故に出家しなければならなかつたのであるか。又出家する事に依つて彼等の生活には如何なる變化が現れて來て居るのであるか。先づ之を薄雲の女院に就いて窺つて見るに、女院は先帝の四の宮であつて、早く桐壺帝の女御として入內し、母更衣を失つた源氏は、先づ自らの母として此の女院に親んで居る。然るに源氏は次第に、此の女院の幻の中に自らの戀の對象を求める事になつて來た。そして一つには源氏は未だ子供であると云ふ女院の心の弛みもあつたのであるが、兎に角源氏の戀の結果として此の二人の間には遂に不倫の關係が結ばれて仕舞つた。かくして若紫の卷には、女院が病に依つて三條の邸宅に里居して居る間に、源氏は私かに忍んで、女院の言葉に從へば、前の過を繰返へし、之が原因をなして紅葉の賀の卷に於いては皇子即ち後の冷泉院の御降誕がある。茲に女院は女院の生涯を一貫して繼續される處の新たなる苦しみを持たなければならなくなつた。而かも同時に、矢張り此の卷に於いて、是迄女御であつたものが中宮となり、引續きその皇子は東宮に立たれて、桐壺帝後の太上天皇の御寵愛は一層此の藤壺の中宮に集つて來て居る。次に榊の卷に於いては太上天皇崩御の事があり、從つて中宮は退いて三條の邸宅に移られる。かくして再び源氏との交渉が茲に開かれるのであるが、矢張り同じ卷に於いて中宮は、一つには新たなる源氏の戀から逃がれる爲めに、遂に之を機會として出家されて仕舞つたのであつた。そして最後に薄雲の卷は、

當時未だ三十七歳であつた此の女院の崩去を傳へて吳れる。

以上は女院の略傳とも云はるべきものであるが、此の生涯を通じて、源氏との關係が女院の心に解くべからざる苦しみを與へて居た事は云ふ迄もない。殊に冷泉院に就いて秘密を守らなければならなかつた事は、最後迄此の女院の心を苦しめて居る。即ち夢にも帝は冷泉院と源氏との關係を知る事なくして世を終られて居り、そして「これのみぞ後めたく結ぼほれたる事に思し置かるべき心地し給ひける」と云ふのが女院の最後の苦しみであつた。從つて出家の直接の動機は、新たなる源氏の戀から身を逃れて東宮の地位に動搖を與へる結果を免れんとする事に求められるのであるが、自らあさましとも宿業とも思ひ悲しまなければならなかつた源氏との是迄の關係が之に關連して來て居る事は云ふ迄もない。出家した女院が源氏に答へて居る言葉の中にも、「今始めて思ひ給ふ事にもあらぬを云々」と云ふ言葉が求められるのであつた。不倫の戀に陷つて之を世に忍ばなければならない結ぼほれた心、固より其處には罪の自覺もあつたであらうが、兎に角その結果として解く事の出來ない悲しみに、又宿業の支配を身に感ずる厭世的とも云はるべき心の狀態に到達し、之が女院をして出家の世界を思はしめる原因として作用して來て居る事を考へなければならない。浮舟の出家に就いては之が一層明瞭に語られて居る。浮舟に取つて出家の原因は投身の原因と相通ずる。投身して救はれたと云ふ儚い運命が浮舟をして出家に至らしめて居るのであつた。そして投身の原因は兵部卿宮との關係にあつた事は云ふ迄もない。その他女三の宮にしても、朧月夜の內侍にしても、何れも之と同樣の關係をその出家に就いて見る事が出來る。換言すれば「物のあはれを知りたる仕業をよしとする」物語の世界に於いて、殊にそれが女性であつた爲めに經驗しなければならなかつた生活の破綻こそは是等の女性を出家の世界に導く原因をなして居るとも云はれるのであつた。從つて出家は

矢張り悲しいものである事を免れなかつた。薄雲の女院の場合に於いても連日宮に於いて行はれて居た御八講の結願の日に、初めて佛の前に於いて出家のお心を傳へられ、美しかつた御ぐしは叔父僧都の手におろされて仕舞つた。源氏を初め席に連る上達部女房等に至る迄、あまりに豫期しなかつた此の悲しい出來事に驚き惑つて居る。「何となき老い衰へたる人だに今はと世を背くほどは怪しうあはれなる業」であるのに、況してそれが若き中宮の出家である。「宮の内ゆすりてゆゝしう泣きみちたり」と云はれなければならないものであつた。然らばかくして人々の悲しみに送られた女院の出家の生活は如何なるものであつたのであるか。源氏の作者は常に出家の生活に深く立ち入る事をして居ない。女院の場合に於いても同様であるが、兎に角之に依つて見れば女院は新たに三條の宮に御堂を建て、矢張り尼になつた女房達と共に此處に出家の生活を行つて居る。一度思ひしめた源氏の面影は容易に心を離れる事は出來ないが、今は後の世の事を願ふと云ふ處に生活の一つの中心が置かれて居る。結ぼほれた心は多少救はれて、時に訪れて來る源氏に對しても、是迄よりは自由な態度を以て、直接その言葉に答へる事等も出來たのであつた。唯源氏は、是迄とは趣を異にした青鈍色の几張のひま〳〵からほの見える薄鈍色、山子梔色の袖口等、却つてなまめかしく、奥ゆかしく思ひやられて、矢張り戀の心を刺戟されなければならなかつた。

かくの如く女院の出家は、出家ではあるが之には尙色々の意味に於いて物語の世界との關連が殘されて居る。又必ずしも之はその本質に於いて物語の世界を否定する處に展開されて來た世界ではなかつた。男の戀から自由である事、後の世の事を願ふ處に生活の一つの中心を求めて居る事に於いて、確かに特殊の世界であるには相違ないが、此處には未だ物語の世界に誘はれる心の態度が殘されて居る。此の意味に於いて出家の世界は、心靜か

ではあるが又淋しい世界である事を免れなかつた。殊に女院は自らは源氏との關係に依つて出家の世界に逃れなければならない心の苦しみを經驗して居るのではあるが、同時にその反面に於いて、東宮の地位の動搖を恐れる心を失つては居ない。從つてその最後の時に於かれても「高き宿世、世の榮えも並ぶ人なく云々」と云つて、或は中宮となり、天皇の母となられた自らの身の上を、高き宿世として感謝する事も出事たのであつた。出家ではなくして中宮である事を、或は中宮として物語の世界に生存する事を願はれて居る心を玆に見なければならないであらう。かくの如く物語の世界に對する高き評價を失はないで、而かも自らは出家の世界に逃れて來て居ると云ふ關係は、女三の宮の場合に就いても見る事が出來る。源氏の妻であつた女三の宮は矢張り柏木中納言との不義の關係に依つて薫大將を娠まれる。而かも産後の經過が思はしくなかつた事を機會として、六條院に於いて出家されたのであつた、宮は、果して薫大將は中納言との關係に依つて姙まれたものであるかを確かめる事は出來ないが、少く共その疑惑は、源氏に對する宮の心を憂欝ならしめるに足るものであつた。一方源氏も亦同樣の疑惑に依つて苦しめられて居る。その爲めに、此の夫妻の間には越ゆべからざる間隙が作られて、殊にその原因を自らの過失に求めなければならない宮の結婚生活は、之を繼續するに堪へないものであつた。宮の出家はかくの如き結婚生活からの脫離を意味して居る。併しながら出家した宮は尙源氏と共に六條院に止まられて居る。夫妻の關係は絕たれたが、源氏は屢々此の尼宮の許に渡られて、自らを捨てゝ出家した宮に恨みの言葉を述べる事もあつた。而かも宮は尼ではあるが、周圍の人々がその美しく垂れた御ぐしを惜んで長く殘す事にした爲めに、尙昔の面影が眺められた。唯源氏の恨みに對しては、「かゝるさまの人は物のあはれも知らぬものと聞きしを云々」と云つて、矢張り男の戀から身を逃れる事が出來たのであつた。かくして源氏が世にある間は六條院に居住し、

その歿後に至つて初めて三條院に移られた事が語られて居る。固よりその子供である薫大將との關係も此の間に絶たれては居なかつた。然るに浮舟の場合に於いては之とは多少その趣を異にして居る。宮の出家に就いては、「さるべき山里などにかけ離れたらん有樣も、またさすがに心細かるべくや」と云はれて、六條院に止まる事になつたのであるが、浮舟は正にその山里に世を忍ぶ出家の生活を送つて居るのであつた。自らの生存をさへも世に知られる事を恐れて居る。換言すれば再び投身する事の出來ない生活を、出家する事に依つて纔かに繼續して居ると云ふのが彼女の出家の生活であつた。物語の世界に於ける經驗は以上の場合に比較して一層深刻であるが、その出家の生活が極めて消極的なものである事に於いて、矢張り以上の場合と相通ずる。茲に於いても新たなる人生の意義を出家の生活に見出して、その立場から物語の世界を否定すると云ふ態度は見られないのである。物語の世界に於いて免れる事の出來ないものゝあはれの生活の矛盾は、未だ解決される事が出來ないで、その儘出家の世界に迄運ばれて來て居る。寧しろその矛盾を經驗する事に依つて生活の破綻に到達した女性の、纔かに生存を繼續する爲めに逃がれて來る世界が、即ち出家の世界であつた。そして此の特殊の世界が存在する事の出來た一つの理由は、後の世の信仰に置かれて居る。

以上は物語の世界から出家の世界に導かれて行く一つの關係を辿つて見たものであるが、源氏の中には尙屢々出家に就いて語られて居る。例へば源氏の戀を受け入れなかつた槿の齋院も、後には出家として現れて居り、源氏自らも、又紫の上も、長く出家を求める心から解放される事が出來なかつた。物語の世界に動搖が現れて來て居る事は、その一々の場合に就いて見られるであらう。

兎に角源氏の作者は、かくの如き意味に於いて、此の時代の社會に女性の心を體驗した。平安朝の女性として、

此の作者は矢張りものゝあはれの道德に支配されなければならなかつたが、同時に佛敎が問題となつて來て居る事は、果して如何なる程度に於いて此の作者が佛敎學者であつたかを詮索する迄もなからうと思ふ。而かも此の物語の世界は、要するに「此の世の外の事ならずかし」であつて、必ずしも此の作者に限られた問題ではなかつたであらう。例へば榮華物語は當時第一の歌人であつた四條公任の出家に就いて語つて吳れる。彼は萬壽元年敎通の妻となつて居たその女子を失つて以來、此の世の望みは思ひ捨てゝ、常に出家の事ばかり考へて居た。併しながら公任の心は尙多くの人々の上に殘されて居る。第一に多くの孫達、就中敎通の長女生子の事が氣になつて居る。その他妻の尼上、花山院の女御であつて今は尼になつて居る妹の謎子、矢張り尼になつて居る孤獨な乳母、容易に是等の人々の上にかゝつて居る心を斷ち切る事は出來なかつたが、遂に翌年の十二月から長谷に籠つて、萬壽三年の正月の初めに私かに出家して仕舞つた。是等の人々の悲しみを見ては、又出家の決心も鈍ると考へたからである。「あさましう心うきものは人の心にこそありけれ。世にある人の、或は悲しき子に後れ、あるは男女の哀に思ふに後れ、あるははぢがましき事いでき、あるは幸ひなくなどして、もとも出家せんにあへぬべき人の、思たゝぬはかくにこそありけれ。」かくの如く公任をして出家の心を語らしめて居る。同時に此の言葉は、如何なる意味の出家が此の時代の社會に存在したかに就いても語つて吳れると見られるであらう、必ずしも戀の關係丈に限らず、惠心の言葉に從へば、或は苦の相に於いて、或は無常の相に於いて、此の世の生活を經驗した人々は、かくして出家の世界に誘はれて行く。そして玆に於いても、出家の世界の成立は後の世の信仰を離れて考へられる事が出來なかつたのである。公任の場合に於いても矢張りその望みは死後の淨土にかけられてあつた。併しながら彼等の場合に於いては、未だその淨土なるものは物語の世界と對立した異つた價値に依つて支配

される世界であるとは限られて居ない。再び惠心の言葉を借用するならば、彼等は必ずしも不淨の相に於いて此の人生を經驗して居るとは限らなかつた。從つてものゝあはれの心を淨土に迄追求する龍鳴抄の作者の態度も現れる事が出來、上東門院の出家に對して、「此の世の御幸ひは極めさせ給へり。後生如何にと思ひきこえさせ給へりつるに、いとうれしう心安き御事なり」と云ふ道長の言葉を聞く事も出來たのであつた。併しながら何れにするも出家は一面物語の世界の動搖を意味するものであつて、物語にあつては未だ薄明の如き世界であるには相違ないが、茲には矢張りその本質に於いて物語の世界を否定する新たなる思想の發展を豫想せしめるものがあるとも云はれるであらう。救ひを求めて居る彼等の心は、軈てその救ひを根據付ける思想に迄到達しなければならない。而かも彼等の救ひは後の世の信仰と離るべからざる關係に置かれて居た。後の世の信仰は必ずしも淨土敎と限られた事ではないが、一面に於いて淨土敎の發達は此の時代に於ける著しい現象であつた。そしてその淨土敎は惠心から法然、或は親鸞へと移つて來る。此の法然或は親鸞の時代に至れば、物語の世界は明かにものゝあはれに代る新たなる價値に依つて照らされなければならなかつた。即ち佛敎的文學論の擡頭であつて、源氏供養の如き現象も之に伴つて現れて來て居る。かくの如き思潮の發展を辿つて、改めて以上見る事の出來た源氏物語を顧る時に、源氏は中世的な思潮の發展が已に平安朝の文化に胚胎されて居る一つの關係に就いて語つて吳れるものと見る事も出來、茲に極めて重大な一つの意義が求められなければならなかつた。